双松会会報

第32号「双松会」通巻36号「松高北高同窓会報」通巻36号
発　行　松江市奥谷町164番地
島根県立松江北高等学校内　双松会事務局　TEL：21－4888
FAX：21－4977
印　刷　株式会社島根県農協印刷　TEL：21－3476

青春グラフィティー Vol.9

六〇年代の記憶再び

高校21期（昭和45年卒）

「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ」。サミエル・ウルマンの詩「青春」の一節。マッカーサーが座右の銘にしたことから、日本でも広く知られるようになった。六月十一日に開催された二一期の還暦記念同窓会は、この一節を思い起こさせた。

二十一期生は十一クラス、四百九十八人。一九六〇年代の終わりを見届けて川津校舎を卒業した。島根原発1号機の本体工事が始まり、大阪万博が開幕した春のこと。高度成長期の終盤で、CMソング「大きいことはいいことだ」が耳に残り、フォークソングとGS（グループサウンズ）全盛の時代。三年後にオイルショックが襲うことなど夢にも思っていなかった。

卒業から四十二年目。母校の校長は今、同期の勝部昌幸君が務める。同窓の校長は歴代六人目で、松本幹彦前双松会会長以来二十年ぶりになるという。同窓会の期日が、東日本大震災から三カ月の節目に当たったのも、何かの巡り合わせだろうか。

同窓会には百二十一人が出席した。今回の「仕掛け人」で幹事代表の加島幸夫君が趣旨説明。東京から参加した秦（旧姓内田）和子さんが「これからが人生の円熟期」と、自らが打ち込む舞台になぞらえて乾杯の音頭をとった。

立食会場では、思い出話や記念撮影があちこちで続き、進行役の声が聞き取りにくいほど。クラブ活動や名物先生、大学紛争の余波など話は尽きず、名札と顔を見比べながら会場を巡る姿が目立った。沖縄返還を目指した当時の首相佐藤栄作が、ちょうど学園祭のころ、松江で「一日内閣」を開いたことも話に出た。

当時は、先生と酒を酌み交わすことがある一方、全員の模擬試験結果が教官室前に張り出された。今では信じられない光景だろう。髪を伸ばして「イムジン河」を口ずさみ、分厚い「都市の論理」を斜め読みする――そんな「流行病」もあった。そうかと思えば、腕から血を流した先輩が、たまり場にしていた下宿に駆け込んできた。「やつらチェーン持っちょうさがってのー」。「質実剛健」の伝統の中で、厳しさがある半面、ある種のおおらかさが寛容された時代。誰もが前しか見ず、振り返るのはシューベルツが歌う「風」の中だけだった。

二次会は、会場を隣に移してのフォークソング大会。福田泰輔君と久保田俊也君が待ちかねていたようにギターを持った。「戦争を知らない子供たち」「友よ」「白いブランコ」など十四曲。「イムジン河」「風」もあった。浅野博雄君や門脇憲君が次々に舞台に上がった。

高校時代の写真もスクリーンに映し出された。古ぼけた木造校舎や体育館。クラスごとに幹事が苦労してかき集めた。正面玄関前での記念撮影や学園祭のスナップ。「あれが美濃地（忠彦君）だ」。会場から声が飛び、四十一年前の友人・自分探しにしばし熱中した。最後は元応援団長・梅木辰雄君の出番。四十数年ぶりに聞く美声？に先導され、全員で校歌を斉唱し、手拍子で「四十二年目の再会」を締めくくった。六〇年代という時代に、自由な校風と個性的な先生や先輩、良き仲間たちに恵まれたことを感謝したい。七〇年代と同じように今、日本は、大震災・原発事故をきっかけに再び岐路に立つ。冒頭の詩「青春」には「理想を失ったとき初めて老いが来る」とある。「人生の円熟期」を「第二の青春」ととらえ、再び前を向いて歩き出そう。被災した人たちに負けないように。

大森　正己

最後に、昨年八月から準備してくれた二十一人の幹事さん、お世話になりました。

（同窓会の写真は宮崎照君の協力で二一期のHPに載っています）

ごあいさつ

会長　庄司肇

今年の三月には全日制と通信制の卒業式があり参加しました。式後、双松会の入会式があり新しく全日制二八七名、通信制に一五五名の人達が入会してきました。これにより双松会の総数が四〇、六二三名となり全国でも屈指の卒業生会となりました。

さて、去年、新双松の松の植え換えをしました。今年の冬に山陰地方を襲った大雪のため多少傷みましたが成長には心配ないようです。この植え換えの事業には足立洋氏（高21期卒）には献身的なお世話になりました。心から感謝申し上げます。百年後二百年後には雄壮な姿となり、我々の後輩達の心の拠になるよう願っています。

起雲館（同窓会館）の中にある資料室の整理整頓に取りかかっています。旧制中学校を始め各学校の資料を観やすいように陳列し直しました。中には旧制中学時代教鞭をとったハーンの書簡など貴重な品等もあります。ぜひ、起雲館にお出掛けいただき、懐かしい青春時代を思い出していただきますようご案内いたします。なお、資料室の一層の充実のため、品物を提供（写真の形でも）いただければ幸いです。

去年の十二月八日には本会長を永らく務めていただきました柴田午朗氏がご逝去されました。双松会運営へのご尽力に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

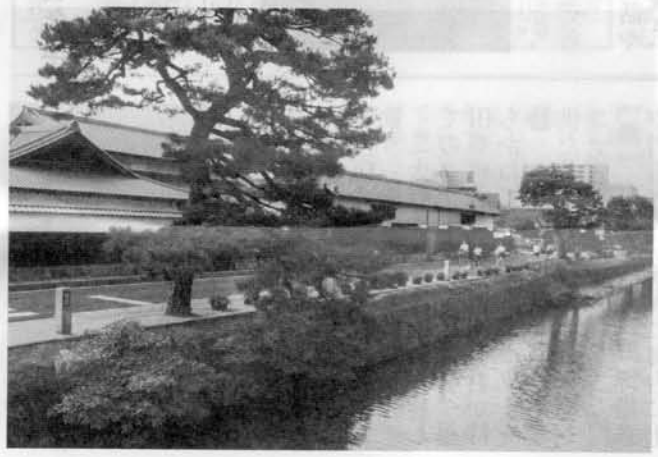
塩見縄手界隈

校長　勝部昌幸

双松会の皆さまには、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。また、日頃より母校への温かいご支援とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、今年で創立一三五年を迎えた本校ですが、「質実剛健」の精神のもと営々と「文武両道」を貫き、その存在感は島根県の高等学校教育の中心的役割を担う学校として今も堅持しております。これも、それぞれの時代に精一杯学校生活を送られた諸先輩方のご活躍と今があってこそと考えています。昨年秋から、松本幹彦前会長が中心となり本校起雲館三階の双松会資料室の展示物の整理が進んでいます。この秋の一三五周年記念式典には公開の運びとなる予定ですが、星霜を重ねた一つ一つの資料を見るにつけ、先輩諸氏の純粋で初々しく、そして堂々とした青春の軌跡は、私をあの頃に連れ戻し心打たせてくれるものがあります。是非ご覧いただきたいと思います。

この紙面では学校長として近況報告をしなければならないところですが、ご批判は承知の上でそれに代わり、今回は殿町方面から本校に登校する今の生徒たちの景色を紹介してみることにします。開府四〇〇年を迎えた松江市のシンボル松江城を左に仰ぎながら大手前を過ぎ、今年三月にオープンした風格のある松江歴史館の重厚な瓦屋根を右に見て宇賀橋を渡り、昼間なら遊覧船が行きかう堀川沿いをヘルン旧居に向かって歩道を歩けば、緑落とす川面から城下町松江の落ち着いた風情を感じます。武家屋敷の家並みが始まるころ横断歩道を渡り、右手の閑静な知事官舎を後にして、今年整備された赤山の坂を登りきれば、正面に双松を眺めて左手の校舎生徒昇降口に入ります。どうでしょうか。観光案内にしてもいいような風景です、昭和五十三年（一九七八）に、川津校舎から二本松が待っている赤山の校舎に戻って早三十年余りが経っています。その間、



この風景の中に本校はとけこみ、通学する生徒は街を活かし、そして本校の風格は一層増しているように思えます。川津校舎で過ごされた皆さま（二十一期の私もですが）は、京橋川河畔の柳や造船所とガスタンク、校庭周囲の湿地と校門前のグランドストアの景色が懐かしいかもしれませんが、私はこの塩見縄手界隈の環境で学ぶ本校生徒は羨ましく思うと同時に、川津校舎で育った先輩としても母校の場所がここでも良いのだと思うようになりました。

先日、二十一期の還暦同窓会が幹事の骨折りで開催されました。それぞれにあの頃の瑞々しさはなくなっていたものの、話し方、しぐさは当時を思い出させてくれるものでした。私たちの高校時代は無謀と思われるような体験をしたり学生運動に身を投じる者がいたように各個人に若さのエネルギーが満ちていたような気がします。その逞しさが少し欲しい今の生徒たちですが、あの頃と社会環境は大きく変わる中にあって、それでも今を精一杯生きていると思います。彼らが私と同じような年代になったとき、塩見縄手界隈の景色とともに本校の伝統の良さを誇りに思うように私たち教職員はこの松江北高校の教育に邁進していかなくてはならないと思っています。

終わりになりましたが、双松会の益々の発展と会員の皆さまのご健勝とご活躍を祈念いたしまして会報発刊のご挨拶といたします。

事務局だより

○創立百三十五周年記念双松会総会開催のご案内

明治九年に教員伝習校変則中学校が創設されて、其の後松江中学、松江高校、北高校と変わり、今年は創立百三十五周年になります。これを記念する式典を左記のとおり開催いたします。五年に一度の式典を充実したものにしたいと実行委員一同、心を一つにして取り組んでおります。会員の皆様の参加を、心よりお待ちいたします。

期日：平成23年11月19日(土)
会場：ホテル一畑（14時～）

尚、詳細は別刷「ご案内」をお読みいただき、申込みをお願いいたします。

○二十三年版名簿「双松」発刊のご案内

今秋、新名簿を発刊いたします。今回は名簿専門業者、旭出版にすべての作業を依託しての発刊となります。既に予約、入金済の方には九月下旬にお手元に届けられます。新名簿に今回は、校歌・メッセージ・寄稿文を集めたCDが付きます。今後、購入御希望の方は、完成後、旭出版より電話で販売案内があります。御利用下さい。また、事務局でも申し受けます。

販売価格―五千円（送料込み）

○資料室リニューアルのお知らせ

北高校敷地内の一番奥まった所に、同窓会館（起雲館）があります。そこの三階に、お茶室・沖舟亭と南田庵、資料室があり、資料室については貴重なものがあると認識されつつも、整理がなされておらず、手つかずの状態でした。昨年秋より、前会長松本氏、元司書島田さんのお力を借りて、おいでになられた方に分かりやすいように、整理していただき、保存方法も展示方法も整備いたしました。さらに充実したものにするためにも、資料の提供を呼びかけたいと思います。今年度は、古い教科書で、特に明治、大正、昭和初期頃のものを、お譲り下さるか、お借りしたいと思います。御一報下さい。

○会報助成金について御報告（平成23年3月31日）

平成２２年度

会報編集助成金会計決算書

平成２３年３月３１日

収入総額	5，057，870円
支出総額	1，500，000円
差引残額	3，557，870円

【収入】

費目	金額	備考
繰越金	5，055，823円	
２２年度分	0円	２２年度振り込み（　0件）
利息	2，047円	
合計	5，057，870円	

【支出】

	金額	備考
本会計へ繰り入れ	1，500，000円	２２年度発行会報印刷
合計	1，500，000円	補助金として

監査報告

会報編集助成金会計について監査いたしましたところ適切に処理されていることを認めます

平成２３年 6 月 3 日

会計監事　古瀬誠　栗原康郎

○寄付金のお礼

昨年度、左記の方々より寄付金を頂戴しました。厚くお礼申し上げます。

11期より一〇万円
20期より一〇万円
61期より一万九九三円

挿絵画家の藤川 秀之さんを紹介します

松高11期同窓会会長
小林 哲朗

四月末に、近畿双松会の会長である押田良樹氏（松高十一期）より、メール添付で二枚の絵が送られて来ました。その絵は、「杜子春」と「海幸彦・山幸彦」の絵本の表紙絵で、とても重厚感のある印象深い絵でした。

絵の作者は、松高十一期の藤川秀之氏の作品だと説明してあり、その絵を初めに見つけられたのは、押田氏のお姉様（松高八期、加藤尚子様）だということでした。私たち同期生は、藤川氏が、挿絵画家であることは、全く知らなかったのです。

以下は、電話で藤川氏に直接聞いた内容です。

「大学を卒業してから、グラフィックデザインを専門学校で学び、その職業に就いた。しかし、自分の絵が描きたいと思って、出版物関係を主に、カットから描き始め挿絵を手がけるようになる。一九七一年、三十歳頃であった。めるくまーる出版社のフォレスト・カーター原作の『リトル・トリー』という本は、教科書にも掲載された名作。その挿絵と、表紙カバーも担当している。二〇〇〇年頃、ブラジル人の出版社社長が、『杜子春』の話をブラジルにも知らせたいと絵本を出版されることになり挿絵を頼まれた。それが、きっかけとなり本格的に、描き込んでゆく方向へ進んでいった。デザイン出身なので、普通の絵というより、イラスト的要素を持ち続けた挿絵を描きたいと思い、今まで必死で描いてきた。人物、特に顔にこだわっており仕上げるのに苦労する。この年齢になっても勉強不足で画風も変わってきている。児童画を主に、一生懸命取り組んでいるが、ひっそりと絵を描く性分と思っている。」という、とても謙遜したお話でした。

押田氏によると、藤川氏は、現在までに外国語版を除き七十二冊位、その上に本の装幀も二十九冊位手がけておられるということです。主な作品には、小泉八雲原作の「樹のおつげ」「さめびとのおんがえし」や、芥川龍之介原作の「くもの糸」もあります。現在、藤川氏は、東京都世田谷区在住ですが、同期生は、近いうちに帰省していただき、いろいろお話を伺い、合わせて松江市で作品展示会を開くことも計画しようと考えています。

藤川氏作品は、松江市立図書館には二十二冊。県立図書館には二十六冊あります。松江北高図書館には、「リトル・トリー」が一冊しかないようです。どの図書館も、藤川氏が松江市出身だということをご存知ありませんでした。

皆さま、どうぞ、一度図書館にでもお出かけいただき、藤川秀之氏の作品をご覧いただきたいと思います。

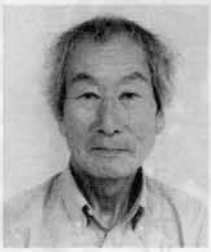
追記

本記事入稿後、七月二十一日に藤川氏ご本人が北高にいらっしゃいました。

ご著作の一部を寄贈いただくなど、勝部校長、庄司双松会会長と親しく交流して下さいました。

寄贈していただいた著作は、後日整備して北高図書館でご紹介させていただきます。

編集担当



藤川 秀之 氏
松江市出身
1941年生まれ

特集！ さらば北高通信制

赤山との別れ

坂本　育穂

平成二十二年の昨年、通信制同窓会は「さよなら赤山校舎」と銘打ち、卒業式に参列し、終了後、旧職員卒業生百余名でパーティーを開催した。

通信教育は昭和三十年（一九五五）松江工業高校から松江高校に移管、平成二十二年（二〇一〇）その学舎を去り宍道高校となった。

川津赤山五十と五年
　今日は別れの通信制
　これは私が作ったパーティー用の安来節だが、肝腎の歌い手不在で幻となり果てた。
　以下駄作で貴重な紙面を割く不遜をお許し願いたい。
　誰でも何時でも何処でだろうと　通信教育門を開け
※発足当初の理念である
　出雲石見に遙かな隠岐に
　働き学ぶ友ぞあり
※当初、松江農林高校と浜田高校に設置されたが昭和三十七年（一九六二）松江北高校へ統合。
○数学難問苦闘の朝は
　鈍った頭で出勤し
○やっとまとめてリポート書いて
　ホッとしました
　ポストに入れて
○老いも若きも心は一つ
　机を並べたあの授業
○リポート提出テストも受かり
　面接満たして単位取る
○弥生の空が晴れてはいるが
　卒業証書に涙顔
○通信教育継続努力
　体に染みたよ　骨までも
※単位修得の三原則はリポート、テスト、面接授業である。
　異なった年代の人が様々な条件を克服し、勝ち得たものには格別の想いがある。息長く努力を続けるのが通信教育の道であり人生の道でもある。
　宍道に学舎移りはしたが
　双松魂消えはせぬ
※「さよなら松江北高校通信制」は平成二十五年（二〇一三）三月である。

通信制課程閉校によせて

同窓会会長　野津　裕

双松会の一隅に席を頂くのは川津校舎・赤山校舎を卒業した五、二四三名、宍道校舎で今年卒業した一五五名と残り二年間の卒業生である。我々もまた、声高らかに双松魂を歌うものである。

平成十四年に、私が前藤原会長からバトンを受けて九年、私達が本校の学舎を去ることになろうとは夢にも思いませんでした。

通信制教育が本校移管以来五十有余年、五千有余名の通信教育生は、さまざまな思いを胸に巣立たせて頂きました。本当に感謝の気持ちでいっぱいであります。

さて、私と通信制とのかかわりあいを、当時を思い出しながら書いてみようと思います。私は昭和三十四年に中学を卒業し工業系の高校へ進学を決めていましたが、家庭の事情で働かなくてはならない状況で進学をあきらめざるを得ませんでした。同級生は、皆楽しく高校生活をおくっているのに……と思うと残念と悔しさが毎日頭の中にありました。仕事にも慣れた頃、昭和三十八年に通信制の門をくぐりました。三年間は何とかゆっくりでも進みましたが、四年目になって難しくなり勉強する時間も少なくなりとうとう学校へ行く気がなくなり、約一年間はスランプ状態に陥り悩む日々が続きました。そんな時に、今まで一緒に勉強していた友が勉学続行への奮起を促してくれました。それ以来卒業を目指して頑張る事ができました。その時、同じ道を歩む友のありがたさをつくづく感じました。通信制は独学の部分が大半なので、つまづくとそれで進まなくなる傾向が非常に大きいものです。私が通信教育で得たものは、苦しくても前に向って頑張れば必ず目標は達成できるということでした。それを基に今日まで、当時の苦しさを乗りこえたことを励みに毎日を過しております。

平成二十五年春で閉校となり、それと同時に今後同窓会への入会会員はなくなります。我々同窓会の今後の運営については現在検討中ですが、これからも双松会には一層のご指導ご交誼をお願いする次第であります。

「あせらず、やすまず、あきらめず」

～北高通信制の伝統の継承～

25期卒業生　安達　友紀

私の北高通信制への勤務が始まったのが、三年前の春。奥谷校舎、双松の見える通信制職員室からでした。手狭な部屋に副校長以下二十数名が勤務。在籍生徒は約一、八〇〇名（内、約三〇〇名が西部在住）、県下全域に所在してレポートでの学習を主に高校卒業をめざして学んでいました。我々教員は、生徒が送ってくるレポートを添削することが重要な仕事です。単なる○付けではなく、不十分なレポートに対しては、生徒が合格点を取れるよう丁寧にコメントを書き添えて送り返します。三～四回やり取りすることも少なくはありません。中には、年間二千数百部のレポート添削を行う教員もいます。日曜日にはスクーリングを行います。いわゆる授業です。奥谷の全日制の教室を使いました。月曜・金曜には、元の消防学校を利用した黒田校舎で半日程度のスクーリングを行いました。日曜日には、二〇〇名を越える生徒が奥谷に来ます。その数に圧倒されるという生徒は月・金の黒田でのスクーリングを活用していました。日曜スクーリングは一時間目から六時間目までの間に、ほぼ全科目展開します。生徒は自分の履修する科目に自主的に出席します。服装は自由、座席など決まっていません。ただし、教科書・学習書・レポート・筆記用具は必ず持参することと他の生徒の学びの邪魔はしないことは最低限のルールです。

多くの生徒が少し「回り道」をしたり、一般的な大集団での教育に馴染まなくなったりして、それでも高校を卒業しようと学び直しを始めるために通信制を選んだ人たちです。年齢もまちまちです。自分の孫ほどの若い生徒と一緒に真剣に学ぶ年配の生徒さんもいます。毎年の卒業式は圧巻です。二〇〇名程度の卒業生一人ひとりに卒業証書が渡されます。その生徒一人ひとりの表情を見ているとこちらの胸も熱くなります。

通信制は全日制などとは違い、「画一」「強制」「競争」という言葉と対局にある高校です。そのようなものが「高校教育か？」という声もあるようですが、通信制はあくまでも補完するものだと思います。あまりまぶしい光を浴びることはなくとも、様々な学び直しのための最後のよりどころとして通信制は存在するのだと考えます。「あせらず、やすまず、あきらめず」は北高通信制のモットーでした。

北高通信制は平成二十五年三月には閉課程となります。昨年四月から通信制に入学した生徒は宍道高校籍となりました。現在は移行期間として、宍道高校で通信制の学びが継続されています。定時制との共用や来年四月から西部拠点校の発足にともなう西部の生徒の転籍など様々な課題はありますが、北高通信制の教育はこれからも少しずつ形を変えながらも、宍道高校や新設の西武拠点校で引き継がれて行くことと確信しています。

特集2

エルマー・スペリー賞受賞のためアメリカに旅して

中学62期　山口　琢磨

昨年三月にアメリカ造船学会から突然連絡があり、本年のエルマー・スペリー賞受賞者に推薦したいというので、そんな賞の名前も知らなかった私は大層驚いて調べてみると、ジャイロコンパスを発明したスペリー氏に因んで設けられた賞で、運輸交通技術の進歩に顕著な貢献をした人に年一件贈られ、アメリカの機械、自動車、船舶、航空、電気、土木の六学会のいずれかの推薦により選ばれるという。功績と認められたのは私が昭和四十七年以来三十八年にわたって開発に取組んできた航洋押船技術なのだが、これは造船部門でも謂わば変り者がやる技術と私本人が思っていたものなので、さて、どうしようかと考えている間に話が進んでしまったらしく、六学会共同推薦で贈ることに決定したから受けてくれという話なので、意を決して頂戴することにしたのである。

無動力の艀を後から押す方法はアメリカの大河で一五〇年前頃に始まったもので、引きに比べて速力が出て、引かれ艀と違って押船と艀の直接結合体は自力で止まれる等の利点があり、今では世界の大河で広く使われていて、特にアメリカでは数十隻の艀をロープで束にしばり、数人の乗組員の大型押船で押すことで輸送費の大幅節減が行われている。ミシシッピ河をニューオーリーンズに下って来る穀物はすべてこの方式で運ばれるので、大量の穀物を買う日本もその低運賃の恩恵を十分受けていることになる。

押航艀を初めて見たのは昭和三十二年暮に或る調査団でビルマを訪れた時だが、これを実際に造る機会はなかった。

日本への初の導入は三十八年の神戸港内人口島造成工事だが、これはアメリカのロープ連結のコピーで、六〇センチの波でロープが切れるという代物であった。その後改良は試みられたが、その上限でも瀬戸内海や東京湾から自由に外へ出るには程遠いものであった。この紐つなぎの改良の成果など知れたものと踏んでいた私は、かなり早い段階からどんな強いものでも造れる金属製機械としての連結装置の開発に取り組み、四十七年に一発目の成案ができた時点で偶然若い個人船主の方と出会って採用してもらう幸運に恵まれ、一番機から実用機を造って所期の成績を上げることができ、その一年半後には既に八隻が就航していた。これらは海上土木工事業者が埋立工事に使う艀のための装置で、当時の埋立工事全盛に乗っかったものであったが、間もなく大手船会社から遠洋航路用のものの依頼があり、新型連結装置を開発して五十年夏に船が竣工。一年の中国航路の後にインドネシア航路に就航し、ここに世界初の遠洋航路の押航艀が実現した。これら初期のものでは船の造り方も人任せにできないものが多く、船も、つなぐ機械も設計せねばならず、多忙を極めたが、自分でやっただけ好きなようにやれて間違いがなく、結果もよかった。

アメリカの河の船団

世界初の航洋押航艀 八興丸船団（昭50-1975）

こうして各種の連結装置を考案し、どんな我儘な要求にも一応答えられるようになったのだが、最後に残ったのは速力である。二隻の船をつなぐと、その間に形の段差ができて、そこを水が流れるから大渦が発生し、その抵抗で速力が出ない。これを防ぐ目的で両船を固定的につなぐ三本ピンによる連結装置を早期に開発していたのだが、両船の形の関係をどうすれば渦が消えるのか判らず、実質上の渦無しにできる船の形の考案に十年以上を要した。しかしこれの開発で押船技術の開発は概ね完了したと思われ、私も八十歳に近付いていた。

今となって赤山の同級生と会うと話題になるのは、我々の生き方は質実剛健そのものであったことと、所謂軍国主義教育らしきものを赤山では一切受けなかったことである。

今回の地震と津波で、我々世代は一生に二度の国難に遭うことになった。前回の敗戦では今より二桁低い国民生産力で出発し、一応復興が形をなすまで二十年を要した。だが、面積の八五%が傾斜地というこの狭い島国に一億以上の国民をかかえるという世界最貧国の形をした国土で、これだけの豊かさを人間の力だけで築き上げたという成果は人類史上初めてのもので、植民地をもたずして豊かさを作り出せることを史上初めて証明したものである。これこそが戦後の日本人がドイツ人と並んで世界に誇り得る業績であり、教育の衝に当たる方々はこの日本人として持つべき誇りを若い人達にしっかり叩き込んでいただきたいと思うのである。

デンマーク スヴィッツァー社の石炭運搬艀（冬の北海）

今回のアメリカでの受賞では、シアトルで十一月四日、米造船学会年次総会の際に授賞式があり、受賞後十分程の感謝の挨拶を行った。そこでは今は名も知られない人のアメリカの河での考案がなければ私の技術開発はなかったこと、米日とも自己に必要なものを発明し、発展させ、それら全体で米日造船技術者の協力で一つの技術部門が完成したことを強調して話をしたのであるが、四〇〇人の英語国民を相手に初めて試みた英語の講演は結構好評だったようで、ホッとしたのであった。この英語の力は松江中学で矢野、前田、植田、吉田の四先生から英語の基礎を教え込まれ、鍛えられたことで備わったもので、これなくしては私の英語の力はあり得ないのだ。

今回アメリカを訪れた印象は、アメリカ人の率直、明快、公平ということで、今まで欧州とはつき合ってもアメリカとつき合いのなかった私にとっては実に最高の機会であり、知らないアメリカに大きな誤解を持っていたことを思い知らされた。人は公平でなければならぬ。公平を守ってつき合えば、友は世界中にいる。これが今回訪米の結論である。

三点支持固定連結式 第一船「土佐」船団

各期だより

松江高校十一期同窓会ご報告

小林　哲朗

昨年十月十六日㈯、ホテル一畑にて松高11期卒業五十年古希記念同窓会を開催いたしました。

当日は快い秋晴れに恵まれ、全国各地から馳せ参じた同期生はもとより、恩師の兼折博先生、松本幹彦先生のご臨席を得て、総勢二〇〇名の盛大な祝宴となりました。

開会にあたっては、双松会の会長に就任したばかりの庄司肇君のよろこびの言葉につづいて、いずれも双松会の会長でいらっしゃった兼折先生、松本先生のお祝辞をいただきました。

懇親会に入ると、さっそく両先生を囲んで杯を交わし、それぞれ旧交を温め、論壇風発を楽しむものもあり、おいしい食事とお酒に酔いしれてまことに賑やかな交流の場となりました。

宴を閉じるにあたっては、近畿双松会会長の押田良樹君の閉会の挨拶にあわせて再会を約し、お開きとなりました。

なお、このあとクラス毎に別れて東本町方面へ繰り込み、賑やかな一時を過ごしたことをつけ加えておきます。

松高22期（昭和46年卒）還暦記念同窓会のご案内

私達の期から普通科22期・理数科1期の合同の同窓会となります。卒業してから五年毎に同窓会を開催してきました。次回は二年延長して、還暦記念として来年開催を計画しています。

これまで百数十名が出席する大同窓会を行ってきました。

次回は二〇〇名を超す盛大な同窓会を目指しています。ご期待下さい。

各クラス代表による一回目の準備会を四月二十四日に開催しています。詳しくはホームページをご覧下さい。

日時　平成24年8月12日㈰

場所　ホテル一畑

詳細は未定。決定次第ホームページに掲載します。同窓会SNS（松江と東京の近況などを写真中心に掲載）

www.geocities.jp/matsuekita22/

双松会地区だより

東京双松会地区だより

東京双松会　事務局

泉　宏佳　高校14期（昭38年卒）

平成二十二年度は前年度に引き続き体制整備を検討。次年度での会長交代を留保しながら、総会の成功と会報発行をめざした。総会は十一月七日㈰アルカディア市ヶ谷にて本部及び近畿支部からの来賓も迎えて、一二〇名が集まり成功裏に終った。詳しい様子は東京双松会H・P及び会報第二号で今年度の総会案内と同時に報告する。また近畿との交流は何年か毎の定例化を予定している。

そして今年度は昭和三十七年卒の芦田氏を会長とし、恒例の部活報告は野球部で、別記のとおり総会を予定しており、特に参加の少ない昭和四十年代、五十年代卒業生には多数の参加を呼びかけたい。ご案内はお盆過ぎごろ発送の予定。

また、現在、会則の改正や事務局体制の活動強化を検討しており、ご意見のある方は事務局まで連絡ください。

平成二十三年度総会案内

・期日：10月1日㈯
12時から15時半ごろ
・会場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）
JR、地下鉄「市ヶ谷」駅から徒歩二分
電話：03-3261-9921
・部活報告：野球部
・問合先：東京双松会事務局
新宿区西新宿7-16-6
㈱かもす内
電話：03-3361-4094

近畿双松会地区だより

近畿双松会　事務局長

松本　耕司（高校16期＝北高卒業4期）

昨年十一月の年次総会は念願の大阪のシンボル「中之島中央公会堂」で、一三二名もの参加をいただいて盛大に開催することができました。

本部、同窓各位のご支援に対し、心から御礼を申し上げます。

本年度も会員・役員一丸となって、同窓間の世代を超えた親睦・交流のため、又、母校と郷土の発展を願って活動を続けてまいります。

一、本年度の総会懇親会

・期日：11月27日（日）
正午～午後3時
・会場：「中央電気倶楽部」大阪市北区堂島浜二丁目
・本年の懇親会では同窓のミュージシャン宇田川妙さん（高27＝北15期・安来在住）の公演を楽しむ予定にしています。

本年も多数の皆様のご参加をお待ちしています。

二、その他の主な行事

①第31回懇親ゴルフ（済み）
②第6回文楽鑑賞会（済み）
③第4回落語鑑賞会（9月）
④第6回歴史ウォーキング（10月23日・北近江方面）
⑤第1回健脚ウォーキング（11月5日・箕面北摂方面）
⑥平成23年度「会報」発行（来年3月予定）

会報発行は近畿の長い伝統ですので、役員一同、頑張って毎年の発行を続けています。

バックナンバーをご覧になりたい方はお申し出ください。

三、重点取り組み

①会員相互交流の推進

世代間の交流を更に推進するため、会員各位に出身小・中学校や在籍クラブなどの情報提供をお願いしていますが、ひと味違った同窓会風景がやがてできあがると考えています。

②東京双松会との表敬交流

平成二十三年度役員会総会報告

七月十六日、サンラポーむらくもにおいて今年度の役員会総会が開催された。

今年度は総会に先立って、創立百三十五周年記念双松会総会第一回実行委員会が行われた。第一回ということで、金平幹事長を中心に顔合わせと仕事内容の確認などがなされた。

役員総会は四十八名の出席のもと開催され、会長を議長に次の議題について協議・報告がなされた。

【議題】

一、平成二十二年度会務報告、決算報告、監査報告

二、平成二十三年度会務計画、予算（案）審議

三、起雲館（卒業生会館）修繕費について

四、役員人事について

新副会長　古瀬　誠氏（田中氏後任）

監　　事　杉原伸治氏（古瀬氏後任）

五、百三十五周年記念総会について

【報告】

・名簿、会報について

・申し合わせ事項の確認とお願い

・北高13期から五年を一つの単位として、その五年の期別幹事から常任幹事を男女一名づつ選任する。（H15役員会総会）

・原則として五年ごとにその単位内で常任幹事を交代する。（H23役員会）（交代された際は、必ず事務局までご連絡ください）

平成22年度　双松会会計決算書

収入総額	6,024,660円
支出総額	4,256,111円
差引残高	1,768,549円

【収入】

費目	予算額	決算額	増減(△)	備考
入会金	2,453,200	2,582,000	128,800	全日制 延べ 10,985人×200円 通信制 154人×2,500円
繰越金	1,671,707	1,671,707	0	平成21年度からの繰越金
繰入金	1,500,000	1,500,000	0	会報編集助成金会計より
寄付金	0	270,593	270,593	11期、13期、20期、61期、東京双松会
雑収入	5,093	360	△4,733	預金利息
合計	5,630,000	6,024,660	394,660	

【支出】

費目	予算額	決算額	残額(△)	備考
会議費	200,000	188,891	11,109	常任幹事会、役員会、各地総会補助
会報発行費	3,600,000	3,003,020	596,980	会報印刷・発送代(24,407通)
通信事務費	50,000	40,491	9,509	役員会案内・資料送付代
記念品費	550,000	420,111	129,889	卒業記念品・卒業証書用丸筒代
旅費	500,000	478,940	21,060	各地総会への本部役員派遣旅費
人件費	150,000	94,000	56,000	資料室管理・整備
雑費	50,000	28,442	21,558	香典・弔電代
予備費	530,000	2,216	527,784	菓子代
合計	5,630,000	4,256,111	1,373,889	

平成23年度　双松会会計予算書

【収入】

費目	本年度予算	昨年度予算	増減	備考
入会金	2,472,400	2,453,200	19,200	全日制 延べ 11,112人×200円 (926名×12ケ月) 通信制 100人×2,500円
繰越金	1,768,549	1,671,707	96,842	平成22年度からの繰越金
繰入金	1,500,000	1,500,000	0	会報編集助成金会計より
寄付金	0	0	0	
雑収入	9,051	5,093	3,958	預金利息等
合計	5,750,000	5,630,000	120,000	

【支出】

費目	本年度予算	昨年度予算	増減	備考
会議費	200,000	200,000	0	常任幹事会、役員会、各地総会補助
会報発行費	3,600,000	3,600,000	0	会報印刷・発送代、案内状
通信事務費	50,000	50,000	0	役員会案内・資料送付代
記念品費	550,000	550,000	0	卒業記念品・卒業証書用丸筒代
旅費	500,000	500,000	0	各地総会への本部役員派遣旅費
人件費	150,000	150,000	0	資料室の管理・整備
整備費	300,000	0	300,000	資料室の整備(パネル・写真代等)
雑費	50,000	50,000	0	慶弔費等
予備費	350,000	530,000	△180,000	
合計	5,750,000	5,630,000	120,000	

北高生の活躍

島根県高等学校総合体育大会

総合　第2位
男子総合　第1位
女子総合　第4位

五月下旬から六月上旬にかけて県総体が行われました。総合優勝四連覇はなりませんでしたが、県内各地で北高生が活躍しました。

八月に北東北で行われる全国高校総体（インターハイ）への出場権を獲得したチーム・選手を紹介します。

○陸上競技部

男子一〇〇m　2年　金森和貴

二〇〇m　2年　金森和貴

四〇〇m　3年　佐々木拓

四〇〇mH　3年　佐々木拓

四×一〇〇mリレー

女子四〇〇m　3年　石原理恵

走幅跳　3年福間優里奈

四×四〇〇mリレー

○女子バスケットボール部

○登山部　男子団体

女子団体

○柔道部

男子　3年　花本　僚

○テニス部

男子シングルス　2年　永原賢造

○新体操部

女子個人　3年　坂野友莉恵

文化部も活躍しています

八月に福島県で行われる予定の全国高等学校総合文化祭への参加が決定した部を紹介します。

○囲碁部　3年　尾原萌華

○百人一首かるた部

3年　杉原啓太

3年　小室葉香里

○美術部　3年　山根万菜実

3年　和田憲太

○合唱部

○写真部　3年　小豆澤成治

その他の全国大会

○放送部

NHK杯全国高等学校放送コンテスト

研究発表部門「下校放送」

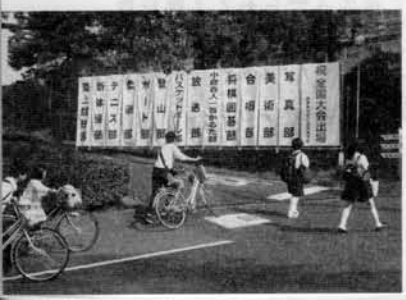
朗読部門　1年　三島志織

○囲碁部

全国囲碁選手権大会

女子団体

現在も「文武両道」の教育方針のもと、部活動に積極的に参加し、精一杯頑張っています。今後とも温かいご声援のほどよろしくお願い申しあげます。



昨年から開始した東京双松会との双方の総会での交流は、お互いに大きな刺激となったことから、本年も継続して前へすすめていきたいと考えています。

■お問い合わせ（諸行事参加お申し込み）先

・事務局長　松本耕司宛
・携帯　090－6609－8817
・メール　k-matsumoto@hi-ho.ne.jp
▼「近畿双松会ＨＰ」もご覧ください。各お申し込みもできます。
→http://www.kinki-soushoukai.org/

講演会も行う。

また、今年の旅行は、松江北高校創立一三五周年記念式典への参加も兼ねて、松江市周辺散策を計画している。

会員は、米子市を中心にその周辺にかなりの数となるが、各種行事等への実質活動者は一部に限られており、それも高齢化と若手不足に直面している。今後は若手会員の掘り起こしが最大の課題である。

米子市およびその周辺に在住または勤務されている皆さまで、「米子双松会」にご入会いただける方は、左記の事務局までご連絡下さい。

連絡先　米子双松会事務局
〒689－3402
米子市淀江町淀江771
TEL&FAX
0859－56－2315
中西　秀夫

米子双松会　地区だより

米子双松会　事務局長
中西　秀夫（昭和39年卒・15期）

米子双松会が発足して四十年。今年二月の総会で齋藤勝（昭和35年卒）が、第八代会長に就任した。

本会では、二月の総会、七月の納涼会、秋の旅行、月一回のゴルフコンペを定例的に行っている。今年の総会は、双松会から庄司会長・金平幹事長、母校から勝部校長先生と伊藤先生をお迎えし、盛会裡に開催した。七月二十四日の納涼会では、来年の古事記編さん千三百年にちなんで、「古事記よもやまばなし」の

東部双松会　地区だより

東部双松会　幹事長
足立三樹夫（昭和40年卒・16期）

平成十八年十月二十九日、総会を開催して以来、四年以上もごぶさたをしています。

島田一嗣新会長を迎え、約三十人の出席を得て、久しぶりにハリキッての開催でした。

それでホッとしたのと、忙しさにかまけて、すっかりサボッてしまいました。

この間、玉木国寿前会長、柴田午郎顧問をはじめ竹谷元副会長、山本昭郎先輩などかつて活躍いただいた方々を失いました。

話に聞きますと、安来市を通りこし、米子双松会は活発な活動をされていると聞きます。ゴルフ部会をはじめ、色々な部会も編成され互いの親睦を図っておられるそうです。

私達、北高16期の学年同窓会は、オリンピックと称して四年ごとに開いています。

・東部双松会も毎年というとよだってしまい、ついついやらず終いになりがちなので、二年又は三年のペースで確実に開催していきたいと思っている此の頃です。

近々、役員会を開いて今後の方針を検討したいと考えています。

広島双松会　支部だより

広島双松会　幹事長
石原　通弘（昭和37年卒・13期）

平成十八年十月に設立して今秋第六回の総会を迎えます。設立以来同級生や職域を通じて口コミで情報を伝達することとしています。現在七〇〇名程度の卒業生を把握していますが、十分な周知ができないこと、行事への参加は一部に限られることが大きな悩みとなっています。会報をご覧いただいた方、事務局へご連絡いただければ喜びます。

一、今年の活動計画

今年の活動は例年の総会・懇親会に、納涼親睦会一回、ゴルフコンペ二回程度開催して会員の親睦を深めます。また、総会時の催事として「落語」の独演会を予定しています。

二、第六回総会・懇親会

日時　平成23年11月12日(土)
16時～19時
場所　広島ダイヤモンドホテル
広島市西区観音新町
2－4－6

三、その他の行事予定

①　納涼親睦会
日時　平成23年8月3日(水)
場所　広島三越屋屋上ビアガーデン（広島市中区）

②　親睦ゴルフコンペ
日時　平成23年9月25日(日)
場所　宮島志和カンツリー倶楽部（東広島市志和町）

四、連絡先

・幹事長　石原　通弘
739－1742
広島市安佐北区亀崎一丁目二九番二六号
・TEL&FAX
082－842－1416
・携帯電話
090－9507－2312
・E-Mail
ishihara2926@m.email.ne.jp